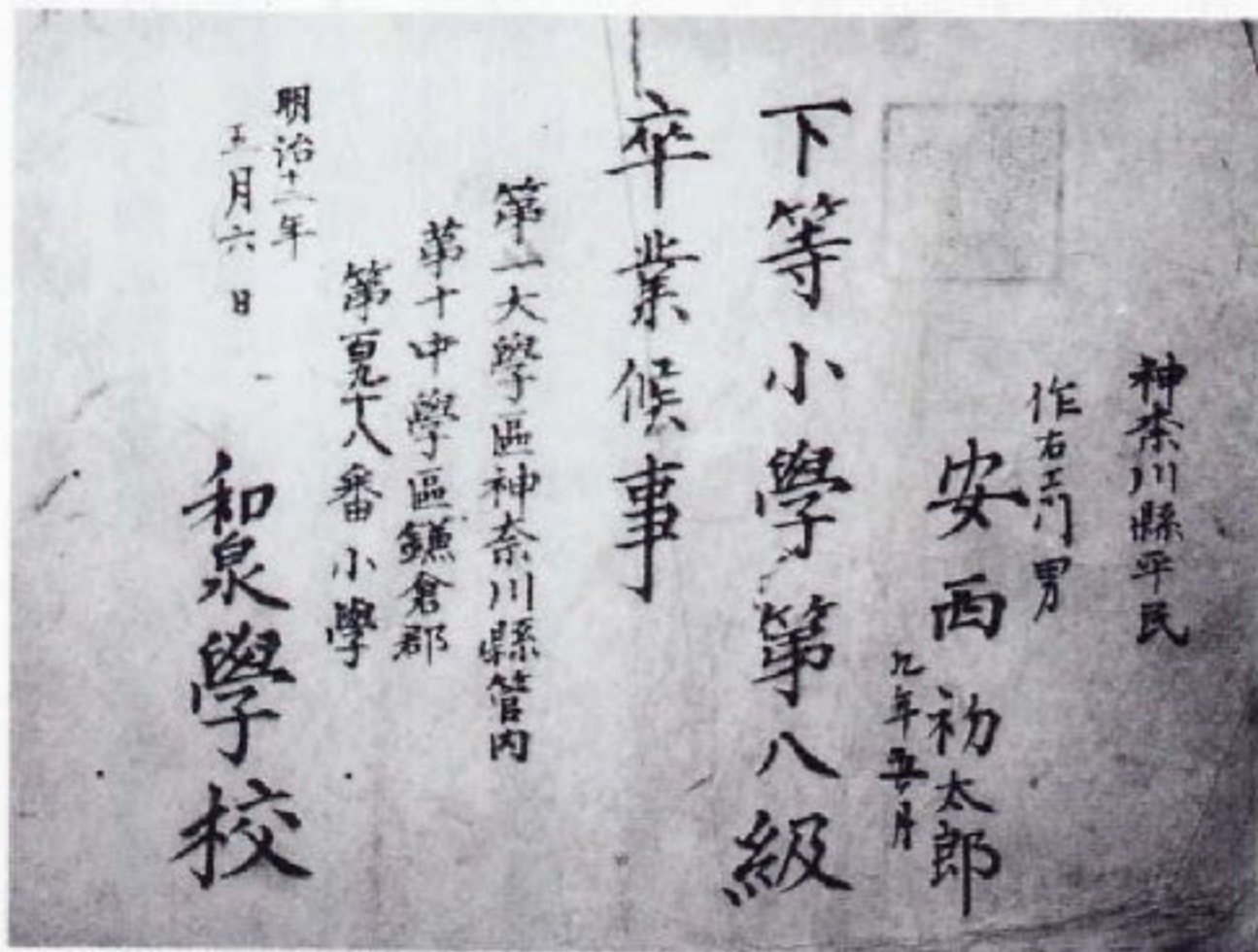


# 矢作良治と和泉学校

明治六年（一八七三）、和泉村に「第十中学区鎌倉郡第百九十八番小学和泉学舎」という小学校が設立された。教員は一人で、九十七人の生徒を教えていた。

富塚学舎（戸塚小学校）の明治六年の日記に和泉学校の教員山村古泉の名前が見えることから、開校当時は、山村古泉一人が教鞭をとっていたのであろう。

開校当時、宝心寺の庫裏を仮校舎をして使用していたのか。皇国地誌に「公立小校、和泉学校と称す。東西九間、南北十一間、面積九十九坪、本村西の方にあり仮に宝心寺庫裏を用う」とあるように、明治十二年当時は、宝心寺の庫



和泉学校卒業証書

裏を仮校舎として授業を行っていたようである。

「神奈川県統計書」によると、明治十四年頃は、矢作良治をはじめ六人の教員が百四十二人の生徒を教えていたとあるが、

山村金平氏所蔵の文書「明治十四年二月より十二月迄学校費清算帳」によると、矢作良治、山村古泉、清水久吉の三人に給与を支給している。このことから、教員六人ではなく、実際は三人の教員が教鞭をとっていたと考えられる。

当時、和泉学校の校長または首席教員だった矢作良治は、秋田県出身の人であった。中和泉の左馬神社境内にたっている忠魂碑によると、矢作良治は、佐竹藩士矢作浅平の長男として生まれた。佐竹藩士がどうして、和泉学校の教員になったのか。明治維新で武士の身分を失い新しい生活を



区内で最も古い忠魂碑



求めてこの地に来住したのであるか。

明治十五年、学務委員の清水源右衛門と天笠喜三郎の肝入りで、和泉学校の建築を行った。木材は、鎌倉材木座の校舎を買い受けて行った。同時に、四谷分校の新築も行わ

和泉学校通常予算

一 貳百五拾円

内 訳

- 金 百八拾円 教員以下給料
  - 金 拾五円 分校家賃
  - 金 拾貳円 学務委員給料
  - 金 参拾五円 書籍器械買入代
  - 金 拾五円 生徒試験入費
  - 金 拾貳円 墨薪油等雑費
  - 小以 金貳百六拾九円
  - 内金 拾九円 生徒月謝
- 右の通り、予算相立候也

和泉学校学務委員

清水源右衛門

天笠喜三郎

和泉村、下飯田村

戸長役場 御中

通常学校予算

れた。ここに和泉学校は独立の校舎をもったのである。

上記は、明治十五年の学校の年間予算である。

和泉学校に生徒が通った和泉村と下飯田村が村高に依じて負担していたようである。

明治二十三年和泉学校は、中田学校、飯田学校と合併して、中和田学校となった。

14

宝心寺と殿墓

和泉親水広場

近くの宝心寺は、和泉山松雲院と号し本尊は阿弥陀仏で、元京都知恩院の末寺である。

また、和泉町五二一九番地の正法寺は、宝心寺の境外仏堂として正観音菩薩を安置し、大悲山慈眼院と号し宝心寺の住職が兼務している。本尊の十一面観音は鎌倉郡観音三十三か所札所



宝心寺



の第二十五番になっている。

宝心寺のおこりは、泉小次郎が菩提寺として建立した泉竜寺という禅寺であった。小次郎の末孫が絶え堂も大破してしまったのを領主の松平勝左衛門昌吉が慶安四年（一六五二）浄土宗として建立し、昌吉の法名「松雲院殿業蓮社定誉法心庵燈居士」から松雲院宝心寺となった。現在の堂宇は、昭和四十四年に再建されたものである。境内には昭和四十九年に横浜市の名木古木に指定された数本の大木が立ち並んでいる。

正面の参道入口には、高さ四mを越す車塔が建っている。明治四年（一八七二）約六十名の寄付者により建立されたもので、塔には次の歌が刻まれている。

昨日みし人はと問えば、今日はなし、

明日は我が身も人に問われん

末遠く思ううちにぞ、近くなる、

身のたねまきよ日の暮れぬ間に

石段を上って行くと左側にお堂がある。中には和泉廻化地蔵尊と、岩舟地蔵尊が祀られている。

本堂裏の墓地内に「殿墓」と呼ばれる徳川時代の和泉村領主であった松平家の墓所がある。

「松平諸家譜」や同寺の過去帳によれば、徳川家康と祖を同じくする、三河国の能見松平家の初代次郎左衛門光親

から、六代目にあたる松平勝左衛門昌吉は、徳川家光に仕え、寛永二年（一六二五）和泉村外六百三十石余の采地を得、後に大住郡に五百石、下総国に五百石の計一千六百三十石を知行した。

昌吉は、その後も加増を受け、合計二千石余を領したという。

昌吉が宝心寺を開基したおり、それまで松平家代々の墓地であった能見の観音寺から、父の五代目庄右衛門昌利の



能見松平家歴代の墓

墓を宝心寺に移し墓所とした。この墓地は、能見松平家の五代目から十六代目までの墓碑と宝篋印塔十数基が立並んで「宝心寺の殿墓」と呼ばれている。

明治以降は、子孫が東京青山墓地を墓所とした。